

博士論文「死者表象の民俗学的研究—神格化と偉人化という視点から—」

要旨

及川 祥平

本研究では、民俗学でいう「人神」的事象に対し、「死者表象」という枠組を設定してアプローチした。とりわけ、死者表象の中でも「神格化」と「偉人化」という動態に注目することで、実在の人物が宗教的高次の存在として認識されていく過程と、世俗の世界における高次の存在として認識されていく過程との複合性ないし近接性を可視化することを試みた点に特色がある。以上の視点は、記憶論の知見を背景にもつ。本研究では認識論的次元において「神格化」と「偉人化」を捉えるべく、記憶過程の動態を「記憶化」と「想起」に整理し、両者を過不足なく記述することを課題とした。学際的な記憶論のアプローチの多くは、記念碑・記念物（祭祀施設も含む）等の記憶の「場」や「かたち」を問題としており、過去の情報の記憶化への関心に偏り、諸個人が行なう「想起」の様態把握を、困難な課題として退けてきた。本研究は記憶論的にも既存の問題状況を打破する試みとして位置付け得るものである。

第一部「近代日本の神格化と偉人化をめぐる世相」では、神格化と偉人化の「近代」を包括的眼差しによって把握し直すことを課題とした。一章「顕彰神論—楠木正成の表象史から—」では、顕彰神を表象史という観点から検討することで、過剰に近代性を付与される傾向に再考の余地があることを指摘した。近代の人神の特徴とは、顕彰神の創造であるよりは、国家を前提とした神と偉人の政治的利用であったといえる。二章「偉人化される死者たち—近代の贈位をめぐる—」では、近代の死者の偉人化を全国規模で俯瞰すべく、贈位に注目した。贈位には多分に歴史再編の意図があり、民衆の心情とは乖離したところで行なわれる「上からの評価」であるかのようなではあるが、ローカルサイドでも申請運動や候補者選定、祝賀会が行なわれるなど、ナショナルな論理とローカルな論理の接合ないし緊張関係のもとで行なわれていたといえる。

第二部「神格化と偉人化の実態」では個別事例に実証的にアプローチした。一章「郷土の偉人の変容—山梨県における武田信玄祭祀の近世と近代—」では、ローカルな武田信玄観の、近世から近代への移行期における変容を解き明かした。一方、二章「偉人の発見—大岡忠相墓所の史蹟化と贈位祭の検討から—」で取り上げた大岡忠相は神格化されていないが、その他の人物においては神格化の契機ともなった贈位によって、墓所の史蹟化が進み、祭礼が生みだされている。この場合、贈位は、地域と忠相との関係性が発見される契機となった。一章および二章では、近代における偉人表象の問題にも踏み込んだ。前近代的な偉人表象については、三章「伝説にみる偉人の神秘化と権威—信玄・家康の伝説を中心に—」で、近世の伝説を素材に信玄および徳川家康の語られ方を分析した。規模の相

違はあれ、信玄も家康もともに世俗的な権力者であったが、両者とも、これを権威の源泉として登場させる由緒的な用法の伝説が語られる一方、弘法大師のような神秘的伝説の主人公ともされていた。ここからは、世俗的偉人に注がれる眼差しと神を仰ぎ見る眼差しとの近接性ないし複合性を確認することができる。

第二部までの議論は歴史的世界における偉人と神を論じるものであったが、第三部「現代社会における神と偉人」では、それらの現代の状況を捉えることを試みた。一章「神・偉人の観光資源化と祭礼・イベント―大岡越前祭と信玄公まつり―」はイベント等の宗教性が見受けられない祝祭空間において、人物が神的に取り扱われたり、記念碑・銅像の類が宗教的態度の対象とされることを「形式感覚」という論点を設定することで理解した。また、この種の歴史に関わるイベント・祭礼にしばしば見受けられる歴史的情景の再現を銘打つ催しについて、そこで現前化されている過去に関するビジョンの質にも考察を加えた。二章「教育資源としての神・偉人―赤穂市における義士教育を中心に―」では、歴史上の人物の教育資源化という問題に取り組んだ。歴史の観光資源化論が、しばしばそこに対外的アイデンティティの提示を読み解くのに対し、教育資源化論からは集団の成員育成（対内的アイデンティティの育成）への意思が見受けられた。また、四十七士は映画・テレビで人気の人物であるが、メディア状況の変化に伴い、児童・生徒らの関心が希薄化する傾向がうかがえた。メディアの影響力をアプリアリに前提化せず、メディアの体験的次元を受容論的視点から解き明かしていくアプローチが今後要請される。三章「子孫であるということ―その立場性をめぐって―」では、歴史上の人物の末裔者であるという立場性の問題に取り組んだ。末裔者の人々の活動は歴史的自己像の実現への要求という点から理解できるが、これらの人々が公共領域で発信される様々な歴史表象に対し違和感を表明する姿からは、歴史への態度の複数性が確認された。

以上の各章を通して、本研究では「神格化」と「偉人化」の様態、それらの近接性ないし複合性を問題としてきた。それは両者の研究対象としての等価性としても強調できる。そして、そのような等価性を否定する民俗学の認識論的問題性として、以下のことを指摘した。まず、民俗学は、柳田國男以来堅守してきた人神の拡張説（崇り神起源説）への検討を怠ってきた結果、民俗宗教的事象を優位化する眼差しにとらわれてきた。その結果、顕彰を動機とする人神は近代の政治性を刻印された非民俗的なものとして矮小化され、また、権威・権力とは切断された存在として（あるいは抑圧・抵抗する存在として）人々を理解する人間モデルに陥って来た（民俗純粹化志向）。しかし、偉人化と偉人の神的表象化はともに歴史的な現象として理解する余地がある。日本文化を方向づけてきた仏教・儒教思想はすでに五世紀頃には伝来しているが、この仏教・儒教は人を神格化（あるいは類似の高次化）する文化伝統を有している。外来思想を排除する柳田説に淵源をもつ認識枠組の問題性はここからも明らかであろう。

本研究をふまえて取り組むべき課題は以下の点である。第一に「偉人化」ないし「人を

讀えること」の文化史的・比較文化論的研究である。第二に「身近で平凡な死者を想起すること」の質的次元へのアプローチである。第三に、大多数の人々における歴史の体験の様態を掘り下げていく「民俗学的歴史認識論」（あるいは歴史認識の民俗学的研究）である。この視点から、「負の歴史」の取り扱いをめぐる文化史的・比較文化論的研究を蓄積していくことで、靖国問題といった重要な社会的課題にも多文化共生論的なスタンスからの提言を行なっていくことができるであろう。